

博士論文執筆から10年が経過して

東邦大学理学部 今井 泉

1. はじめに

現職教員が連合学校教育学研究科の学生として研究を進めていく場合、最大の課題は「研究のための時間をいかに確保するか」である。平成17年度の合同ゼミナールでは、現職教員のための時間活用についてお話しさせて頂いた。2回目となる今回、博士論文執筆から10年が経過し、その当時のことを冷静に見つめ直すことができた。博士論文の作成に努力されている皆様の少しでもお役に立てる事柄があれば幸いである。

2. 博士論文執筆の頃

(1) 師との出会い

私は、私立中学校・高等学校の教員として勤務しながら教育学研究科（理科教育）に2年間、連合学校教育学研究科（自然系教育）に4年間在籍した。中等教育の現場に勤務しているため、指導教官とは常にメールで連絡を取り合い、指導を仰いだ。そして、勤務が終わってからは、できる限り大学に出向き、指導教官から直接指導を受けることを心がけた。仕事をやりながらも研究を纏めることができたのは、指導教官である下條隆嗣先生、鎌田正裕先生をはじめとするご指導いただいた諸先生のおかげであった。私は、修士・博士課程を通した研究指導体制の中で着実な論文指導を受けてきた。振り返ると、諸先生の御指導に十分応えるだけの努力が足りなかったことを痛感する。

(2) 研究の意義・面白さ

研究より通常の勤務が優先される生活の中で、「いかに研究を進めるか」を常に意識せざるを得ず、研究が進まない焦りを常に感じていた。しかし、生徒と接し、教育の現場にいる強みを生かした研究は自分自身にしかできないという強い気持ちで過ごした。すなわち、何のために論文を書くのかという研究の原点を常に意識することで、問題意識や研究のオリジナリティを明確にすることができた。また、研究課題をクリアしたときの面白さは今でも忘れられない。

連合学校教育学研究科入学1年目に、どのくらい論文執筆と研究を行うかがポイントではないだろうか。

(3) 時間管理（「論文投稿」、「調査」、「実験」）

本来、教師は人間を相手にする仕事なので、通常の勤務時間内で、ひとりになって研究の時間を確保する

ことはかなり困難である。当時、常に心がけていたのは毎日の時間管理で、研究するための時間をいかに確保するかが勝負であった。キーワードとなっていたのは「論文投稿」、「調査」、「実験」で、下記の1)～4)を実行した。

1) 中、長期的な目標の設定

- ①博士論文提出までの研究計画（概要）と勤務予定の一覧表（3年分、A4版1枚程度）を作成した。
- ②毎年5月に提出する「研究実施計画書」をできる限り詳細に作成した。
- ③勤務予定と「研究実施計画書」の研究予定がひと目でわかる1ヵ月ごとの一覧表を作り、常に持ち歩き、いつでも見られるようにした。

2) To Doリストの作成

3) 早朝時間（4：00～6：00）の活用

4) 考える時間、研究のみに集中する日の確保

3. 博士論文執筆後の10年

2013年4月に現在の勤務先に移るまでの7年間、連合学校教育学研究科に在籍した時と同様に、勤務校において学年主任（高校1年～3年）、そして、大学の非常勤講師、NHK高校講座の講師、日本学生科学賞中央審査委員、全国私立中学高等学校理科研修会の専門委員、高等学校理科教科書の執筆等の仕事は続いた。また、勤務校では進学指導主任、教務部長の仕事も増え、以前にも増して勤務が忙しくなった。毎年、学会発表は継続したものの、重要なキーワードであった「論文投稿」、論文の投稿を継続させることができなくなってしまった。当然のことだが、学位取得後も論文投稿を継続させることが重要である。現在は理数科教員養成の仕事とともに、理科教育、化学教育、化学教育カリキュラムの研究をしている。

4. おわりに

合同ゼミナールでのポスターセッションやグループディスカッションは、広域科学としての教科教育学を捉える視点においても重要である。異分野の研究者からヒントや突破口を得る機会でもある。この経験や視点は、現在の私の研究に大いに影響を与えている。